



あなたが積み重ねた「経験」も
糧にできる仕事です。

Amane
Iida

飯田 周

高知家庭裁判所
家庭裁判所調査官

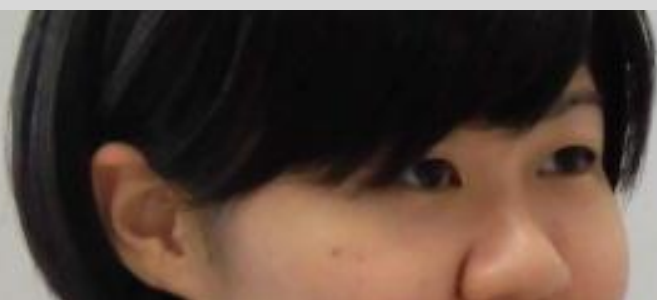
平成 24 年採用

家庭裁判所調査官

多様性に触れられる仕事に魅かれて

私は、大学時代に家族社会学の授業を受け、家族形態の変遷や多様性に興味を持ちました。また、一般的に「家族＝幸せなもの、安らぎを求めるもの」として描かれることが多いように思いますが、家族という身近な人間関係の中にも様々な思いや感情があり、その在り様も一つのイメージでは括れないものであることに気付きました。そして、家庭裁判所調査官になれば、一つ一つの家族、さらにその中の一人一人と向き合い、多様な価値観や社会の状況に目を向けながら家庭内の問題の解決を援助していけるのではないかと思うようになりました。

現在、家裁調査官に任官して3年目を迎え、家事事件と少年事件を担当しています。担当するケースは一つとして同じものはなく、改めて家族の在り方が多様であることを実感しています。



人と人との「接点」を探る

家事事件での私の経験を基に、家裁調査官の仕事を少しだけ紹介します。

別居している親子の交流がうまく実施できない事情がある場合などに、父母が家庭裁判所の調停を利用して、別居している親と子との交流方法を取り決めることがあります。その際、円滑な紛争解決のために、別居中の親子が裁判所内で面会する機会を設けることがあり、そこでは家裁調査官が交流を援助します。

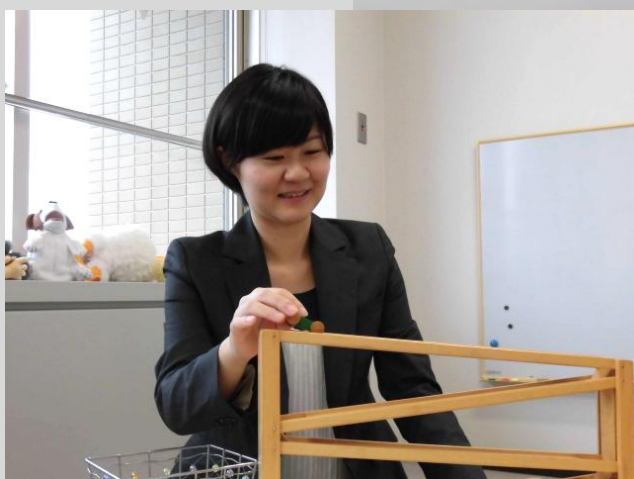




以前、裁判所内で面会交流をすることになったケースでは、事前に父母それぞれからじっくりと話を聞いたところ、双方が互いの態度に不満を募らせており、親子の交流の在り方を前向きに考えられる状況ではないとがありました。一時は、予定していた親子の面会交流を取りやめることとなりましたが、父母それぞれの言葉や態度には、共通して、お子さんのために協力関係を築いていきたい気持ちもあることが垣間見られたため、それを糸口に父母双方に働きかけたところ、父母は次第に歩み寄り、親子の面会交流を実施することができました。

別居している親とお子さんがおもちゃで遊ぶほほ笑ましい場面に立ち会った時には、心底ほっとしたのを覚えています。

父母間の対立が激しく、主張が平行線のように見えたとしても、それぞれが抱える思いの中に、少しでも共通点、すなわち「接点」となる部分を探し出し、問題の解決につなげていきたいと思う日々です。



家裁調査官を目指す皆さんへ — 幅広い知識や経験を糧に —

家裁調査官を目指す皆さんの中には、法律や心理学等の専門知識が不十分なことを理由に受験をためらっている方がいるかもしれません。でも、その点は、採用後の研修や職場でのフォローアップ態勢が整っているので心配はいりません。

家裁調査官に任官後の現在でも、家族の争いに巻き込まれているお子さんの気持ちを引き出しにくいことがあり、調査事務で迷いを感じることもあります。上司や先輩に気軽に相談できる雰囲気があり、いつも周囲からの確かな指導・助言が得られるシステムが整っています。家裁調査官同士はもちろんのこと、裁判官や書記官と意見交換をする中で、私自身の考え方の癖を知り、知識や経験を補充することもできます。



家裁調査官は、家事事件で小さいお子さんと接する機会もあれば、少年事件で思春期の少年や子育てに悩む保護者の話を聴くこともあります。様々な世代の人を相手にする中で、専門知識のほかに、日常の何気ない体験が意外にも仕事に役立つことがあります。

例えば、少年が関心を寄せる本を自分も読んだことがあれば、そこから面接が展開することも考えられます。多様なバックグラウンドを持つ人たちと向き合う仕事であるがゆえに、皆さんがこれまで積み重ねてきたどのような経験も、家裁調査官として働く上で役立つ可能性があると思います。

まずは、裁判所や家裁調査官を少しでも身近に感じていただければと思います。そして、いつの日か、皆さんと一緒に仕事ができることを楽しみにしています！

